

無料体験版-洗われた魚たち

序 - 本文より -

私は生唾を呑みこんで尋ね返していた。

「・・・十月十日を十年間・・・人格を入れ替えながら・・・？」

そして今度はあからさまに足下のウーム・オーブを覗いてみた。

防声処置もされているし、この体勢でもあるし、表情はそもそも豊かにはなり得なかったが、瞳の輝きだけは変化を残していて、今のこのフェミニストの双眸は、愕然とした恐怖の中に哀しみの色さえ混じっているのだった。

「そういえば『十』の三並びですな。さすがは先生だ。言葉の響きに敏感でいらっしゃる」

教祖は笑ったが、私には初めて彼の声が狂気じみているように聴こえた。

「数字の三並びが我々の教典で不吉とされているというのは俗説です。もっともラッキーナンバーであるという話も我が国の遊戯産業の都合にすぎませんから取るに足らんわけですが、このケースでは縁起のいい数列と考えておきましょうか。どんな親を持つのであれ、赤子の誕

生は祝福されねばなりません」

私は立ちあがった。

「しかし、いくらなんでもやり過ぎでは？ 発狂してしまいますよ」

彼は答えずにただ微笑むだけだ。

．．．そう．．．そうか．．．そういうことか．．．

つまりこれは罰だと言いたいのだろう。

洗脳でもマインドコントロールでもなく処罰――。

自分たちに敵対した人間へ振り下ろされる鉄槌なのだ。

この女は十年の歳月をかけて処刑されるのである！

――――

「出羽健書蔵庫」を開設してから、はや七年が経過した。

それまで十数年に渡って書き留めておいた膨大と言っていい文章を整理し編集し、僅かずつでも発表公開し、また新たな小説を書いて連載し、出羽健にとって門外分野であった3DCGなどにも手を染め、失敗と怠惰を繰り返しては何とかここまでやってきた。暮らし向きは以前とほとんど変わっていない。場末の町の安アパートの一室に巣をつくり、週の半分をアルバイトに使って生活費

を稼ぎ、もう半分を変態創作に費す、わかりやすいと言えばわかりやすい、しかし、わかりにくいと言われても当たらずとも遠からずの、なんとも自己充足的な人生を細々と続けているのである。当然、富や名声や名誉には無縁であり、家族や友人に恵まれる人生でもなかった。もしインターネットが発明され普及していなかったら、私は壁と冷蔵庫の隙間でひからびて死んでいるゴキブリのように、ほとんど誰の眼にもとまらずあっさりと一生を終えていただろう。それがあったばかりに、ネット空間限定ではあるものの変態の友人ができ、変態のファンが生まれ、驚くべきことに浄財を払って私の可視化された妄想コンテンツを購入しようという諸兄にまで遭遇している。かつて世間などは私の妄想を検閲し裁断し隠蔽しようとする学校教育現場のようなものでしかなかったが、それがあったばかりに、今や世間は私の妄想の竈に火を起こすための薪を供給する雑木林のようなものにもなった。私は慎重に世間と折り合いをつけ、品質のいい薪だけをくすねてきては私の妄想を生き長らえさせてきたのだ。この七年間は、まさにその反復の年月だったのかもしれない。

卓上のカレンダーを眺めれば七月に入ったばかりのこの日、私はまた新しい小説を書き始めることにした。長い長い終わりの見えぬ創作の日々が帰ってきた。

潜入取材記者

私はパソコンの画面に映る【野村妙子】なる人物から届いたメールにかなり困惑していた。

それは私の契約しているメールボックスの迷惑メールフォルダにすら分類されず、悠々と中心のフォルダに滑りこんできたからである。HPを開設して、ある時期より、私は自分へのメールをHP内に設置したメールフォームからしか受け付けないように設定し直していた。

日々増大する悪質メールの質と量はそれらを処分する手間隙の無制限の増長をもたらして私の創作活動に影響を与え始めたからだ。以前公開していたメールアドレスはフォームを通過してくる正規のメールのみに有効なアドレスとして限定した。それ以外のルートから混入してくるメールについては何重にもフィルタをかけ遮断していた。もちろんそれも完全ではなく、月に数通程度、「漏れスパム」が入ってきたが、おかげでほとんどは迷惑メールフォルダへ流れこんでくれていた。それなら舌打ちのみで眼を汚す必要もなく、二、三日後の自動消去に任せて黙過できるわけだった。

ところが【野村妙子】メールはそのどれをもすり抜けているのだ。

着信を許可している変態友人のアドレスでもない。フォームからの送信であればこちらで設定している題名が件名の欄に記されているのだが、これは空である。題名が空欄の場合も遮断されるはずなのにフィルタが無力化されている。意図した工作であるのなら、私が知る限り、ハッカー並みの能力でもなければできない仕業にちがいはなかった。

躊躇したが、私はようやくメールを開封した。ウィルス
の存在は検知されていない。

・・・一行目を読んだ瞬間に、私は座高が縮むほどの衝撃に見舞われた。

馬車の駆け足のような動悸すら自覚するほどだ。

そこにはこう書かれていた。

「出羽健こと〇〇氏へ。我々は貴方に面会を要求する。」

〇〇の部分には、驚くべきことに私の本名が記入されているではないか。

個人情報が漏れている！

舌が乾くのを自覚しつつ、私は全文を読みだした。

「きわめて重要かつ緊急な案件について、我々は貴方に面会する必要性が生じた。案件の詳細はメールでは明か

せない。直接面談しよう。下記の日時、場所に来られたし。もし貴方が面会を拒否した場合、貴方の今後の利益と不利益について我々は一切の責任を負うものでない。」

そして私の個人情報のリストが貼り付けてある。現住所、電話番号、生年月日、本籍地、職歴、学歴……。どれも正確なのである。内容はそこで終わり、面会の日時場所が記されていた。町の中心部にある喫茶店がその場所。明後日の午後三時だ。最後に署名が書かれている。

「雑誌『ソシアル』編集部記者 野村妙子」

一体全体、このメールは何なのだ。悪戯？ にしてはあくど過ぎる。個人情報リストは立派な犯罪行為だろう。脅迫？ と言い切ってしまうのも首を傾げたい。この私が、こんな大見得を切ってまで会う価値のある人物のわけがない。金もなければ権力もない、ただの変態妄想人間だ。しかしいずれにしても、私の安全とプライバシーが完全に第三者の管理下に置かれているのは明らかと言える。メール本文で露骨に示唆しているように、彼らがその気になれば、私のネット上で

のいかなる行為もサイバーテロの標的になりうるだろうし、私の個人情報を私の本意ではない状況下へ漏洩するのも簡単だ。金もなければ権力もない、ただの変態妄想人間の私がそれに抗うのは不可能に決まっている。私はもう一度、署名に目を戻した。

「雑誌『ソシアル』編集部記者 野村妙子」

何者だ？ 名前や身分を堂々と書いてある。ネット犯罪者なら匿名が常識だろう。さもなくばご大層なハンドルネームを綴る軽薄さがお似合いのはず。野村妙子とはまた地味な名だ。ひょっとして実在者の本名ではないかと憶測させる微妙なセンをついている。そしてそして・・・

女性記者――

出羽健書蔵庫の読者であれば、この響きに惹かれぬ者などいるだろうか。むろん張本人である私にとって、完全に「萌え」であるのに決まっている。そうか、と鈍い私もようやく疑り始めた。この署名は餌？ 甘い香りを放つ餌？ これに食いついてこいと露骨に鼻先へぶら下げる、危険な鋭い針に刺さった餌？ 食いついたら釣られるとわかっている、ガブリといくしかない変態妄想人間の業を熟知した狡猾な罠？ すると個人情報の強奪がムチとすれば、こちらはアメということになる。この推

理が的を射ているなら、野村妙子が出羽健書蔵庫をよく理解した、老練な策士だ。

アメとムチの操り糸に吊り下げられた関節の少ない人形のように、私は検索サイトのページを開いていた。

『ソーシャル』？ 初耳の雑誌である。検索窓に『ソーシャル』と『野村妙子』とを書きこむ。検索ボタンを押す。――さすがにヒット数は少ない。二ページ未満で足りる量だ。それでも検索できた事実には目を見張った。雑誌『ソーシャル』のオフィシャルページが存在するのである。署名はただの虚偽ではなかったのだ。いや待てよ。サイト自体が偽物である可能性だってある。ちょっとしたフィッシング詐欺ならこれくらいの手間は惜しまない。慌てずにリストの最初に表記されている候補をクリックした。

そこはHP内にある編集員を紹介するページであった。編集員は六名、全員が女性。

簡単な略歴と、編集長のみ写真も載せてある。

『野村妙子』は編集長の欄のすぐ下に位置していた。すると副官？ 年齢は34歳。A学院大社会学部卒。のちに米国へ留学して女性学専攻。帰国後、女性の権利に関するNGO組織に従事。一年前より現職、とある。A学院大社会学部といえば数多くの研究者や論客を輩出している日本のフェミニズムの牙城だ。その後の履歴から言ってもまず間違いなく筋金入りのフェミニストであるの

がわかる。他の欄の女性たちも履歴は似たようである。編集長（佐々木久子・46歳・T大経済学部卒）の写真は仕事机を前にしたバストショット。グレーのスーツジャケットに内は白シャツで襟を表へ返した典型的な働く女性の着こなし。やや丸顔の輪郭にゆっくりと波打たせた黒髪をなぞらせて肩までおろしている。年齢の割に脂肪がついていないような気がする。美人とはいえないが十人並み以下ともいえない、これまた微妙なセン。

偽りのプロフィール・・・タレントを使った公開写真・・・そういうフェイクサイトも多いだろう。しかし端々に感じるリアリティは信憑性の高さを示しているような気もする。

私はHPのトップページへ移動した。

『行動する女性のための雑誌』を標榜する『ソシアル』は、創刊二年目のまだ若い雑誌であるらしい。元々は米国・サンフランシスコに本拠をおく戦闘的フェミニスト団体の理論誌『social』の日本語版として立ち上げられたものだ。当初は翻訳が記事の中心であったが、現在の編集長佐々木久子が就任以来、日本独自の方針で編集が行われているという。姉貴分の『social』にはポルノスタジオの襲撃方法まで書かれていたそうだが、さすがに我が国では『戦闘』の文字が『行動』に変えられており、非合法の活動を煽動するような文章は扱われていない。

とはいえ、一般的な女性誌と一線を画しているのは明白である。政治的社会的テーマが多く、寄稿しているライターも大学の教授クラスがほとんどを占める。

もう一つの特徴は、潜入取材を基にした暴露記事の特集の多さ。標的はいずれの場合でも社会に根付く『sexist pig』であるのはいうまでもない。例えばバックナンバーから、今年二月の特集では、ある地方大学の集団的セクハラ行為を告発しているし、四月号では主に若いOL層を餌食にした悪徳催眠商法を俎上にしている。どちらも記者自ら潜入し身体を張って証拠をつかむやり方が共通していた。

なるほど、こうした隠密活動が得意であれば、出自も出自であるし、サイバーテロのノウハウくらい簡単に仕入れられるかもしれない。

私はそこでとりあえずHPを閉じて考えをまとめることにした。

どうやら『野村妙子』は実在し『ソシアル』が雑誌を発行しているのも本当らしい。100%の確証は難しいが、勘を含めて事実と見る。彼女たちが行動的フェミニストなら、世界に冠たる我が国のポルノ文化の、末席を汚している出羽健書蔵庫を攻撃対象に選んだとしても納得できないわけでもない。他にいくらでも対象にして効果的なポルノメディアはあるはず、など、疑問を呈するのはいくらでも出来るけれども、例えば、ネットポルノ

文化粉碎一掃計画のためのテストケースとして選ばれたとか・・・。

腑に落ちない点があるとすれば、『ソシアル』の如き私の変態性欲嗜好のど真ん中の雑誌社の活動が、二年間も出羽健書蔵庫のアンテナに引っかからなかった事実のほう。あの潜入取材特集の事件がもし裁判沙汰となってマスコミ等に流れていたとしたら、出羽健がそれを目にしていけないはずがない。変態性欲嗜好のツボを刺激する

『薪』であれば、どんなに疎遠な言語で書かれたページであっても鼻先を突っ込まずにはいられない出羽健である。自国の情報を見逃すなんてあり得ない。そもそもそんな事件は存在しなかったから、という以外の理由を、私は全く考えつかなかったのだ。

だが何より重要なのは『野村妙子』が私に面会を申し入れている現実であろう。

『野村妙子』は潜入取材記者である。

Investigating Reporter である。

出羽健的嗜好上の憧憬だ。どうしてそれを無視できるのか。無視すればこれまでの私の人生は無駄になる。下手を打てば出羽健書蔵庫閉鎖の危機であるとわかっている、明後日の面談を反古にするわけにはいかない。

私は約束の喫茶店に赴く決意を固めた。

SM殺人の真相

地下鉄駅からの階段を上り切ると、足下まで包みこむような曇り空で、小雨が道を濡らしていた。

腹をくくってしまえば恐れる必要はない。失うものはほとんどなく、あったとしてもそれらはすでに『野村妙子』たちの手中にあるのだから、こちらがジタバタしても始まらなかった。

その喫茶店は駅からすぐ近くの路地の中の、寿司屋が有名なビルの二階にあった。見上げれば茶色のスモークガラスの窓に大きく『喫茶』と書かれている。

私は店の扉を押し開けた。

中は広いのか狭いのかわからないほどに暗く、二人掛けの椅子を左右に挟ませたテーブル席が分厚い仕切りで囲まれて半個室化していた。

男性マスターと女性店員一人が私へ敵意に近い一瞥をくれた。

ここは密会・密談用の喫茶店なのだろう。

指定された時刻からはまだ十五分、余裕があった。

どの席にもそれらしき人影はなく、私は適当な場所を選んで座った。向こうが呼びつけたのだ。向こうが勝手に見つけ出せばよい。

珈琲を注文してつまらない週刊誌を開き、湿気った頁を指で伸ばしながら詰碁を解いていると、その時刻が来

て、と同時に、何ら逡巡もなく、私の前の席に、アタッシュケースを持った灰色のコートの女が座った。

「——もっと喜べば？」

それが女の第一声。

「は？」

「美人雑誌記者のご登場じゃないか」

少し濡れたショートヘアの下で、真っすぐにこちらを射抜く視線は、僅かな媚や怖れも排除した、はっきりとした目から直進していた。

「野村妙子さん？」

「うん、そういうこと」

「どうも。出羽——」

「・・・やっぱり暑いから脱ぐわ」

私の言葉をまたぎ越えるように、野村妙子は立ち上がり、コートを脱ぎ去った。中のツーピースもグレーだ。ジャケットにスラックス。オフホワイトのシャツ。

「身体を品評されるから脱ぐなって忠告する同僚もいたんだけどね」

野村妙子は店員にコーラを注文する。声だけなら女優の中谷美紀に似ている。

「で、どう？」

「は？」

「変態フィクションのヒロインとして私はどう？ たとえば何とかいう貴方の小説に出てくる新聞記者小沢ユキ

ちゃんと比べてどうよ？ 少しは食指が動くかな」
タイトル何だっけねえ、あの名作は？ と、野村妙子は
アタッシュケースをテーブルに置き、付着している雨粒
を小指で払いながら言うのである。

「——乗っ取られ女学院、です」

「そうそうそれぞれ」

フェミニスト記者の笑いは当然失笑の響きであった。ま
ったく、自分の小説をからかわれるのは、ブリーフの汚
れを指摘されるのと同じである。彼女の履歴を信じれば
私より十五は若いわけだが、たった三十秒のやり取り
で、主導権は完全に彼女のものとなっている。最前線
での場数も多く踏んだ、有能な女性ジャーナリスト・・・
思わず精巣が縮み上がる。顔も中谷美紀似だったら暴発
していただろう。

「あんな長編、読んで頂いて作者として感激ですな」

「いやいや他の小説もすべて読みましたよ。まあ徹夜は
しなかったけど」

「そんなに熱心なファンだとはますます感激です」

「雑誌編集の仕事というのは無駄な文章を読むところか
ら始まるの」

飲み物が運ばれてきた。それには手をつけず、野村妙子
はケースの留め金を外した。

「さて本題に入るとするか。ソーシャルのホームページ、
閲覧済みですね？」

「はあ・・・まあ・・・」

「なら話は早い」ここで三毛猫のような微笑。「デスク——編集長の写真、ダウンロードしたね？ 編集員全員で賭けをしているんだ。貴方がその写真でマスターベーションをしたかどうかをさ」

「・・・やはり雑誌社の組織的行動ですか。貴方の個人プレイではなく」

目が暗さに慣れてきてようやく彼女が色白であるのに気がついた。

「個人的に言えば、出羽健氏は最も忌避したい男性よね」

「まあそうでしょうけど・・・」

「話を聞けばわかりますよ。すべての謎がね」

野村妙子はA3サイズ用のケースから分厚い紙束の詰まった封書を取りだした。封書の中に、優しげでほっそりした指をつき入れて銀行員が紙幣をさばくように指先を動かすと、一枚の切り抜きをつまみ上げ、そして私の前に置き、五本の指をのせた。

「知っていますか？ この事件——」

爽やかな匂いが漂ってくる彼女の指から記事を手に取った。

「ああこれね」

「やっぱり知らないわけないよね」

野村妙子は感心しているのではなく呆れているのだ。

『宗教法人本部内でSM殺人か！』

などと、当時の週刊誌がショッキングに書き立てた事件。半年前・・・かな？

ある朝、M県S郡にある宗教団体『星彗照世会』（セイスイショウセイ・カイ；そう、あのカルト教団だ）の本部家屋内で女性が意識不明になったと救急に通報が入る。女性は団体の幹部。全裸で荒縄により緊縛されており、口にはボールギャグがはめられていた。

通報者は『星彗照世会』教祖、太良一玄夢（タライチ・ゲム）以下男性三名。

すぐさま病院へ搬送されたが三十分後、死亡が確認される。特異な状況であったため病院側から警察へ通報。事件となる。教祖らの供述によると、死亡女性にはSMプレイの趣味があり、事故当日も男性信者と密室にこもって変態情事に耽っていた模様であるという。女性がいつも教団で行っている祈祷の祭礼に欠席したことからおかしく思った同僚幹部が彼女の部屋を訪れたところ、意識不明の当人を発見、すぐさま教祖を呼び、そして救急に連絡した。

実況検分や教団内外の聞きこみから死亡女性がSM趣味をもっていたことや、頻繁にプレイを行っていたことはほぼ立証できたし、幹部に付き添われて出頭した、プレ

イメイトであると主張する男性信者の供述にも矛盾がなかったため、過失致死として処理された。じっさい全国紙はその手の報道をしていたはずだ。

週刊誌が必要以上に騒ぎ立てたのは、『星彗照世会』に暴力的な紛争を引き起こした過去があったからである。強引な信者勧誘や体罰を思わせる教化、反対者に対する過剰な嫌がらせなど、社会との軋轢はたびたび表面化した。もちろん例のA真理教事件や自身が起こした『山本教授事件』以来、活動をソフト化させたといわれ、最近では落ち着きを見せていたはずだったが、内部でこんな猟奇事件が発覚すればマスコミが励起したのも当然といえば当然である。

曰く『あれはプレイではなく拷問死だった』

曰く『被害女性は教祖の第四妻』

曰く『プレイメイトは信者ではなく教祖本人』

曰く『男尊信仰の生け贄』――

（『山本教授事件』にはあまり触れていない。微妙な経緯をたどった事件でもあり週刊誌のネタにはなりにくかったのだろうか・・・）

もちろんそうした噂は教団によって黙殺されあるいは完全否定され、警察も動いた形跡はない。ひとえに変態性欲のある不信心者の女性の不始末として説明され収束し

ていった。

私はコップに差したストローを弄んでいる野村妙子の表情を盗み見る。

ショートとはいえ額は隠れる黒髪の長さだ。化粧はほとんど無しだが、眉は描いているようである。

bra burning だろうか。ジャケットが邪魔でよくわからない。

・・・切り抜き記事の中には星彗照世会の沿革と解説も載っている。

そもそもは米国の狂信的宗教保守派団体『Liberty of liberties』の分派らしいが、本家が進化論の否定や遺伝子技術による受精卵研究反対、第三世界飢餓国への紐付き援助（わが宗派へ改宗すれば飯を食わせてやる等）といったかなりスケールの大きな『活躍』を見せているのに対し、星彗照世会は主に伝統的家族観の継承と復活を唱える、どちらかといえばドメスティックな問題に運動の重心を置いて勢力を拡大しているようだった。当然それはフェミニズムとはあらゆる側面で衝突してくる。妊娠中絶などはもってのほかであるし、避妊薬も認めない。女性の就労は男性の補助的なものに限定し、専業主婦こそ理想像。出産と育児のためにその全能力を傾けるべき。そしてそれは生物学的に見て最も無理のない女性の在り方であると断定している。

「・・・たしか女性ならスカートを履け、ズボンを履く

のはふしだらだというのもありましたっけ・・・まるでネアンデルタールですよ、こいつら」

私は切り抜きを返しながら野村妙子の表情を探る。少しむっちりとした鼻頭と少女のような唇で嘲笑を形作りながら、フェミニスト雑誌の敏腕記者は再び封書から、今度は一枚の写真をとりだした。

若い娘の写真である。二十代前半だろうか。かなりの美人である。

「死亡した女性よ」

「ほう・・・」

そういえば星彗照世会の女性信者及び女性職員は、例外なく美形でプロポーション抜群なのだった。そこがまた男尊教団と言われるゆえんでもある。フェミニストにとって眉を蹴立てる部分でもあろうか。

「森本美咲。二十四歳。一年前に一度だけ、ソーシャルが情報提供者として接触したことがあった」

「・・・」私は写真を見返した。「潜入しようとしていたんですか？ 星彗照世会に」

私は顔を上げ、モノをねだる子供のように野村妙子へ上目遣いをする。

「裏ではずいぶんインチキなこと、やっているからね。連中も」

「待てよ。するとこのSM殺人は謀殺・・・まさか」
野村妙子はうっすらと目尻を下げる。

「まさか——」

小首まで無実の鹿のようにかしげて続けた。

「——それはないでしょうね。接触は一度だけだったし、彼女もまったく消極的だったから。正義の内部告発者というより、痴話喧嘩の果ての当てつけで密告に走ったって感じだったもの。太良一玄夢のハーレムの権力闘争は大奥並みよ。結局たいした情報も得られず、それっきり」

双つの掌を左右へパッと広げた。

「だいたい想像つくかと思うけど、星彗照世会とソシアルはアメリカ時代からの因縁の関係と言っていいわね」
そうか、どちらもアメリカからの輸入品。かの地でも対立関係にあったのだろう。極東の島国で代理戦争だ。

「ガードが固くて内部に入りこむのは成功していないけど、我々も何度か連中に煮え湯を飲ませている。サイトで見たんじゃない？ H大学の集団セクハラ事件とか、自己啓発セミナーを騙った催眠商法の暴露とか、あれみんなそうよ」

「星彗照世会が嚙んでる？」

「ダミー組織をいくつも通しているけど、裏で糸を引いているのは連中」

「そうそう、そこが一つ謎だったんだけど、例えばその二つの事件、マスコミに載りました？ 僕は全然、目にした記憶がないのですが」

「さしもの出羽健氏の鼻もそこまでは嗅ぎつけなかったか。いつもはトリュフを探し出す豚より鋭いのにな、変態嗅覚」

野村妙子は歯牙にもかけないほどの格下チームと試合をしている高校野球のエースのよう。次の決戦のためだけの、計算済みの試合運びを予習しているのだった。

「連中も色々と学習している。信者勧誘やサイドビジネスの方法論ばかりではない。マスコミ対策や当局対策といったリスクマネジメントも進化させている。行動が頓挫したときにどう立ち回れば最小限の傷で切り抜けられるか、90年代の前例から倣っているのでしょう。いけすかない連中よね」

「『山本教授事件』も結局、彼ら自身の得になったのかどうか、判定は難しいところですよね・・・」

融けて小さくなったコーラの氷を飲み、口中で弄ぶ野村妙子。三十代半ばにしては綺麗な肌の頬が丸い凹凸を移るわせていく。舌を湿らしたのち、語りだす。本邦フェミニストのトラウマ『山本教授事件』については一切無視するつもりらしい。

——ソーシャルも積極的に広報をしていないのが実情という。彼女たちの目論みの中心は、そうした星彗照世会の周辺部分のモグラ叩きではなく、本丸への痛撃だからだ。すなわち内部に潜入し、太良一玄夢の真相を暴き、星彗照世会の犯罪性の確証を握る。社会に無数の触手を

入りこませ、男尊教を浸透させようと企む不倶戴天の敵の中枢を破壊する——これだ。

「そこで白羽の矢が当たったのが——」 淡々と決め球を投げこんでくる行動的フェミニスト。「出羽健氏、貴方ですよ」

「へ？」

「潜入取材記者として適任であると、我々は結論したの」

「・・・私・・・なんで？」

「さっきの森本美咲ね。彼女から得たつまらない——とその時点では解釈していたんだけど——情報とは、すなわち貴方の件だったのよ」

人工色をひいていない唇だが、少し濡れており、艶がある。

「ご説明、お願いします・・・」

「簡単よ。太良一玄夢には、依存とっていい強固な嗜虐趣味があり、セックスはすべてそれをベースにした倒錯プレイにより進行する。もちろん彼はサディストの位置ね」

ハーレムの女性たちはマゾの役割を要求される。まさに男尊教の教祖だ。対人プレイばかりでなく、妄想による陶醉も日常的に情欲のはけ口として用いており、それへのフィクションの利用は底抜けのバケツのように自制が効かない。古今東西の文献、視聴覚資料のコレクション

は地下倉庫の一つのフロアを占有するほどで、中でもここ最近のお気に入りには出羽健書蔵庫なる素人変態作家のサイトであった。

「貴方の小説への傾倒はハンパじゃないらしいよ」

「ほう」

「すべての小説をプリントアウト——それもちゃんと縦書きに——して製本して、最も手に取りやすい本棚の位置に並べているっていうんだから本物よね」

泥で作った団子を褒められた幼児のような気分。素人作家には最大級の褒賞である。

「さらに小説の設定や登場人物のキャラクターを構成し直して、対人プレイにも利用しているんだって」

「シチュエーションプレイですな。——我々の業界では、ツボにハマった、というんですがね。変態性欲には社会的身分も知能指数も関係ありません。『己の嗜好には抗えない』この一点だけが現実です」

私はゆっくりと珈琲をすすった。本日初めて味わう勝利感。

「あ、CGのほうは興味ないらしいよ。絵は下手だって。絵物語ナンタラっていうのは無視しているらしい。残念でした」

突如珈琲が冷えきっている事実気づく。勝ちと負けはコインの表裏。私のコインは鼻息でもひっくり返るアルミ貨だ。

「出羽健先生もわかりやすいわね」動揺する私の表情筋を追って、野村妙子は少なくとも声色だけ良心の呵責を感じさせるものに変化させて続けた。「それでも太良一玄夢は毎週の閲覧を欠かさず、小説への復帰を熱望をしているらしいよ」

「・・・どこまで本当なんだか・・・」

「いやいや本当ですよ。だいいちあの教祖は小説時代の貴方にファンレターまで出している。覚えているんじゃないかな、ハンドルネームはすべてカタカナで『ヨシオカチャン』——」

私は呼吸を忘れしばし言葉を失った。

ヨシオカチャンは実在する。

サイト開設時から小説の掲載を小休止させるまでの数年間、新作ごとに感想を送ってきてくれたヘビーユーザーの一人である。たしかに『絵物語・巖獄』を連載させると、いつの間にか疎遠になっていったっけ。

「・・・感想は文学の勉強をしていたかのように本格的な批評でしたよ。一度ご覧に入れましょうか」

「いや。貴方のパソコンのハードディスクの中身はすべて覗いているから」

「・・・」

「太良一玄夢を馬鹿にしてはいけない。かなりのインテリよ。アメリカにも留学しているし」

野村妙子は写真を指ではじく。写真はテーブルの上を回

転しながら私の前まで滑ってきた。正確にはデジタル写真のプリント。携帯電話のカメラだろう。端正な顔立ち、鋭い目、アメリカならすぐにでもテレビ伝道師になれるようなセックスアピールを漂わせている。

「身長１８０センチ、若い頃はアメリカンフットボールをしていたそうよ。貴方の小説に出てくるサディストとは真逆のキャラクターでしょ。でも事実は小説より奇なり。変態性欲には社会的身分も知能指数も容貌も関係ないってわけね」

この顔で私の小説を読みながら股間を膨らましている姿は想像しにくい、現実とはそういうものか。

野村妙子は身を乗り出した。テーブルの天板のう上に胸が前傾する。シャツの胸元が迫る感じ。首筋から付け根が眩しいくらいに白い。胸の豊かさにまで視線を移す勇氣も隙もまだなかった。

「太良一玄夢が貴方の熱狂的ファンであるのは認めるわよね」

「まあ、ヨシオカチャンが太良一玄夢と同一人物であると断定できるなら、そういっても過言ではないでしょうな」

「森本美咲のこの件に関する密告は間違いじゃないと思う」

「でもウラは取れていないんでしょう？ 痴話喧嘩の果てのチクリなんてどこまで信用できるのか・・・」

「出羽健さんならどうかな？」さらに背筋を伸ばして、
「貴方の最もリスペクトする、つまり貴方がたの業界で
いうところの『ツボ』の作家に会えるチャンスがあると
したら、貴方はどんな手間をかけても会おうとするんじ
ゃない？」

「うーん、作家というより重要なのは作品だからな」

『薪』はあくまで作品のほう。『花と蛇』級の新作を読
めるのなら出来る限りの努力をするだろうが、年老い
た団鬼六氏に会いたいかどうかはわからない。

「なら大丈夫——」野村妙子はウインクでもしそうな機
嫌の良さで言った。「出羽健先生は評判の悪い絵物語に
見切りをつけ、今夏いよいよ数年振りに新作小説に取り
かかる。それを掲示板あたりでそれとなくアナウンスす
る。どう、これなら？」

「・・・ヨシオカチャンが接触してくる可能性はあるで
しょうが、太良一玄夢として乗り出してくる可能性は今
まで通りゼロですよ」

「星彗照世会の本部があるM県S郡の近くのM温泉郷
——ご存知よね？」

日本人なら誰でも知っている。草津や別府並みの認知度
だ。

「今夏、著名な変態WEB作家数名が、そこでオフ会を
やるらしい。六四式氏、赤川京二氏、村田幸次郎氏、あ
るいはアメリカからHomer Vargas氏などもゲスト参加

の意向有り。もちろん我らが出羽健氏も書きかけの新作小説をひっさげてご登場よ。なおこのオフ会には各作家のファンも参加できるシステムになっております。つきましてはヨシオカチャン、貴方もご一緒にいかがですか・・・」

「——っ」

周到に張り巡らされたプラン。多少、机上で作りすぎたきらいはあるものの、これならちょっと覗いてみようかと、気持ちを揺さぶられる余地はある。太良一玄夢の写真はほとんどマスコミに出回っておらず名前を偽れば顔を晒しても気づく者はほとんどいまい。お忍びの夏期休暇に変態オフ会を選ぶ率がゼロとはいえない。

「そこで貴方がうまく立ち回って、教団本部内部にあるあの男の私邸に客として招かれればいい。同好の士には自分のコレクションを自慢したがるコレクター心理もあるからね。そこまで取り入ってしまえば後は楽でしょう。星彗照世会の暗黒の実態を迫真の文章でレポートしてくればいいんだ。腐っても物書きなんだから朝飯前だわ」

「危険ですよ、いくらなんだって」私の金切り声は初霜がおりた朝の蟋蟀の鳴き声と一緒に。「もしもバレたらただじゃ済まない。集団リンチでボコボコにされるのがオチってもんです。いや、腕の一本二本、へし折られる程度で終わればいいが、森本美咲のようになったら取り返

しがつかないじゃないですか」

「だからあれは事故で——」

「確証なんか一つもないでしょう」

まあまあ落ち着いて、と、野村妙子は両手でなだめる。

「潜入取材だから危険が全くないとは言えないけれど、我々ソシアルのスタッフは何度も経験しているってことを忘れないで。サポートは完璧。いざというときの救出措置をいく通りも用意してあります。貴方は大船に乗ったつもりで、そうよ、太良一玄夢と一緒に極上のSMごっこを堪能するつもりでいればいいのよ。つまり自然体でね。貴方の変態性を存分に発揮すれば発揮するほど、このミッションは成功に近づくってわけよ」

野村妙子は椅子の背に上体を預ける。少し白桃色を帯びた左右の手指を組んで、エクササイズ無縁の、年齢的な寸胴感の出てきた腹部に置いた。

「出羽健先生のコレクションもご立派だけど——HDの中、MPEGやJPEGやTEXTで溢れそうじゃない。実際の事件の資料もかなりある——でも、太良一玄夢のそれは貴方を上回るでしょう。何しろ貴方とは財力がちがう。大富豪大貧民並みの差ね。貴方の予想もつかない

『お宝』が眠っているのは確実と言ってもいいんじゃないかな」

変態sexist pig教祖を陥れるためのフェミニスト兵士たちの罠は、毒を盛って毒を制すの、古式ゆかしいアナ口

グ戦法。敵を撃つ銃弾はこれもまた唾棄すべき害虫であるSM小説家。失敗したところで傷つくのはやっぱり

『敵』なのだ。自分たちは手を汚さず、山の上から眺めていればいいだけだ。エリートが思いつきそうな茶番劇である。

いけ好かないのはお互いさまじゃないか。

私は立ち上がった。

「命をかけるほどの『お宝』？　いくらなんだってそれは思いつかない」

美人潜入取材記者はもう十分に堪能した。半年竈の火を絶やさぬほどに薪は仕入れた。これ以上の深入りは分不相応。本物のジャーナリストを雇ってくれ。

「私は変態作家であって変態冒険家ではないんです。手の届かないところにお宝があるなら危険を冒して手に入るより、自分の頭で創造しちゃいますよ。冒険家の適性があつたらそもそもこんな人生、やってない」

「忘れないでよ」美人女優似の声色が変わった。「我々は『作家出羽健』を簡単に消滅させるだけの情報を握っているんだってこと。今の貴方から出羽健書蔵庫をとったら何が残るって言うの。これからの貴方に何が待っているというの。家族もなければ口クな仕事もない、ただの変態性欲者としての貴方には、誰からも尊敬されない惨めな老後があるだけじゃないかしら」

こんな悪党の完璧なサポートを信じてカルト集団へ飛び

こめと？

「作家生命だけじゃないよ」ドスを目前の畳に突き刺す迫力の啖呵。「児ポ法違反でお上に訴え出れば、即座にお縄にしてもらえる証拠が揃っているんだ。量が量だけに執行猶予がつくのは難しいだろうと、うちの弁護士も言ってるよ」

「馬鹿な。私はロリコンじゃない。違反するような画像や動画なんか――」

にたりと笑うフェミニスト運動家。

「まったくない？ 言い切れる？ あの画像の山に――海と言った方がいいかな――第三者がそっとその手の画像を忍びこませたとして、貴方にそれを否定するすべなんか、どこにもないんだし」

進むも地獄？ 去るも地獄？ 立ち上がったまま、立ち止まってしまった。足下を見透かされるだけの、最悪の大根芝居。

「――手の届かないところにある『お宝』では不満、というなら、おや、ここに、手を伸ばせばすぐにでも手に入れられる垂涎の『お宝』があるんじゃないかな――」だだをこねる子供を御すための、取っておきのアップルパイを、冷蔵庫ならぬアタッシュケースから掴みだす野村妙子。今や母親のように鬱陶しく私にのしかかってくる。

アップルパイはA4判のコピー用紙。数枚程度だろう

が、最初一枚に無造作に書かれたタイトルが砂袋並みの重さで私の腹を打った。

『レポート 山本教授事件の実相』

立ち上がり、立ち止まり、またもとの位置に腰を落とす。もはや猿芝居にすぎない。

「・・・畜生、こんなものがあるんだったら最初から出せよ・・・」

劇的効果を高めるためにここまで意図的に無視していたのだ。私の視線は野村妙子には向かず、ずっとレポート用紙に注がれている。私はふらふらと手を伸ばした。しかし用紙をつかむ前に、野村妙子の威勢の良い掌がレポートの上に乗せられた。

「これは部外秘の機密書類だから、こちらとしても決意を持って許可するの。読むんだったら貴方も覚悟を持ってもらわないと」

「・・・残念ながら貴方の勝ちです。手先にでも何でもなりますよ・・・」

「手先だなんて聞こえが悪い。仲間でしょう。同志と言ってもいいかな」

とうとう契約書に判をつかせた詐欺師のように、野村妙子はしてやったりの表情を冷徹な面相の下に隠している。今度は彼女が立ち上がる番だ。そのレポートだけを

残し、あとの書類はケースにしまい、コートを肩にかけた。レシートを摘みあげる。

「さて、詳細のスケジュールは、週末にでも、うちのオフィスに来てもらって詰めるとして――」

あとでまた連絡するよと会計口へ、現れた時以上の軽いフットワークで見えなくなった。

私はレポートを抱え、途中のコンビニで食料を買う手間に苛々しながらも、さっそく帰宅した。精巢はすでに興奮のあまり融けてしまいそうだった。

山本佳恵教授の敗北 その一

実は、出羽健はこの事件のパパラッチである。

宗教団体絡みの事件、しかも元は外国籍の団体となれば、既存のマスコミから流れた情報も極端に少ない中で、表に出た事実のほとんどを収集している。国会図書館へまで行って資料を漁ったし、事件から数年以上経過した今でも、定期的なネット検索を怠らないほどである。どんなに小さなブログの書き込みだって逃していないと断言できる。

そんな私が、野村妙子のレポートに貪りつくのは必然だった。

私は血走った眼で用紙をめくり始めた。

山本佳恵はK大学の教授だった。いや過去形にするのは勘違い。今でも名目上はK大教授の地位にいる。事件のあった年を境にして、彼女自身及び彼女を取り囲む状況が激変したものだから、ついつい過去形を使ってしまいがちである。

レポートの最初に載っているのは教授の著作目録。なるほど、そこをたどってみるのが、この事件の経緯をイメージするうえで最も手っ取り早い方法であるのは言うまでもない。

- ・『乳房の使い方』

処女作にして出世作。なぜ乳房が女性の象徴であり続けるのか。心理学、生物学、社会学、記号学等を縦横に駆使して解き明かした我が国フェミニズムの古典本のひとつ。一般の読者にも話題になり五万部を売り上げたベストセラー。（夕刊紙などでは山本教授のバストサイズに関する記述が話題になったりもした。Eカップの持ち主であるという噂は本人により否定されている）

- ・『魚と自転車』

オトコにとってのオンナ、オンナにとってのオトコ、ど

ちらも伝統に管理されたイメージであり、本来魚に自転車ほども必要はなく、必要なのは無限の組み合わせの許容による未来の展開だ。（一部でフリーセックスを肯定していると物議が起こる）

- ・『ナオミ・ウルフは狼じゃない』

米国のフェミニズム作家ナオミ・ウルフの紹介と、その保守的な本質の限界性を鋭く指摘。（反フェミニズム誌の週刊「春潮」が、ナオミ・ウルフの美貌に嫉妬しているだけと中傷記事を掲載。山本の反論、「春潮」の反・反論を経て裁判沙汰へ発展）

- ・『ガラスの土俵』

米国には企業における女性昇格差別に関連して「グラス・セーリング；glass ceiling」という言葉がある。女性の頭上にのみ見えないガラスの天井が張られており、けっして天井の上には行けない、という批判だが、山本は我が国の企業風土は天井どころか女性を土俵にすら乗せようとしないと、ユーモアたっぷりに寓意する。当時、女性大臣が大相撲のしきたりを破り、土俵上で式次第を遂行しようとして拒否された騒動があり、それをも俯瞰した文明評論とも読める。角界すら巻きこんだ議論が沸騰した。（何者かによる組織的な嫌がらせが始まり、山本を悩ませる）

- ・『教祖の野望～我々はどうして学園を守ったか』

この年、K大の学生相談室の責任者となった山本は、キャンパス内で、当時まだ無名だった星彗照世会の強引な信者勧誘が広がりつつあるのを察知する。拉致監禁すら辞さない彼らは学生自治会の乗っ取りまで企んでいた。教団本部へ単身乗り込み、学生らを救出、教祖と対峙して一歩も引かぬ交渉の末、キャンパスから撤退させるまでの一部始終をルポした迫真のドキュメント。（この頃、星彗照世会の教祖は太良一玄夢ではなく米国人であった。太良一玄夢は二代目。だから教祖というより会長と呼ぶのが正確か。太良一玄夢がどのようにしてトップの座に昇りつめたのか、謎とする向きもある）

- ・『射精される正義感』

学園の自由を守るのには成功したものの、山本教授こそ伝統的家族観解体の首謀者であるとして、星彗照世会による反撃が激しくなる。とくにこの書籍ではインターネット上の妨害行動について取りあげている。山本ブログの度重なる炎上、オープンキャンパス風景を撮影した動画が、某動画サイトに無断流出、それへの『流しコメント』の酷さは凄絶を極める。山本はこれら进行分析することでネット社会の脆さと危うさに潜む、若者の無垢な正義感の組織化を告発した。（『流しコメント』とは動画

のキャプションとして閲覧者が書き込んだコメントを画面へかぶせることが出来る機能である。動画のどの時間、画面のどの位置に流しこむかはほぼ自由で、例えば画面上の、正面を向いた女性の乳首に『X』を、股間に『Y』をかぶせるのもコツさえつかめば比較的容易である。山本への人格攻撃・思想歪曲・容姿侮辱などの集中書き込みは、それ自体で名誉毀損どころかレイプに値するとまで言われた。なおこの動画は史上最高のアクセス数を集めたが、削除とアップのイタチごっこを繰り返したのち、ある時点を境にネットから消えたと言われている)

さて、ほぼ数ヶ月に一作の割で発表してきた山本教授の旺盛な著作活動も『射精される正義感』以降、一年以上の沈黙をみせることになる。ちょうどこの時期、控訴審までいった例の週刊誌との裁判は、山本側が訴訟を取り下げる形で終結した。一審では山本側の主張を認定していたわけで、不可解な顛末といわれた。

さらに、空白を破って目録リストの次に載った著書は、彼女の支持者やファンに衝撃と打撃を与える事態となる。ここまでは大手もしくは老舗の出版社から刊行された、学術書扱いの硬派なものがほとんどだったのに、な

んと発行元がよりによって星彗照世会の御用出版社ではないか。タイトルがまた挑発的であった。

・『真版・乳房の使い方』

山本の代表作のパロディと見まがう印象。いや、中身はさらに愕然とさせるに十分であった。

書き出しの一行目からしてこうだ。

「今明かすが、私の乳房からは、私が未婚で妊娠未経験あるのにかかわらず母乳が迸る」

つまり乳房の暗喩がちがっている。前作ではオトコ目線での女性の象徴として扱われていたが、ここでは普遍的な母性の象徴である。フェミニズムにとって母性は難敵であるし、そのうえ禁止語に近い『普遍性』まで惜しみなく桂冠されているのだ。山本はさらに続ける。

「フェミニストの言辞は自己の肉体の変容を無視するところから始まる。魅力的な雄の前に立たされた時、舌が痺れ、乳首が硬くなり、生殖器が腫れてくる自覚が、いっさい思考や判断に影響を与えないという主張は正義感であって論理ではない。権力を引き受ける男を目撃した時、帰伏して仕えたいという牝猿的な衝動を否定するのもやはり正義感であって論理ではない。論理的でない主張で説得できるのは自分だけであり、固執すれば周囲は

全て敵となる。だからフェミニストは青春時代の正義感の惰性のみで敵中を泳いでいくしかない。それではやがて疲弊し、老化し、崩壊するに決まっている。乳房の把握がまちがっているのだから当然の帰趨である」

これは転向の書であるのか？ どう好意的に読んだところで主張の中心が反フェミニズムへ移動しているのは明白なのに、これまでの山本佳恵の活躍を知る支持者たちは信じられず、反論すら忘れる極限の動揺振りだった。

（そういえば太良一玄夢が会長に就任したのと同時期の出版である）

・『悔悛』

息を殺して次作の発表を待っていたフェミニストたちの眼前へ突きつけられた現実がこれだ。ここに至って転向は決定的となる。何しろ気鋭の社会学者が己の歩んできた人生を嗤い、懺悔しているのだ。事あるごと敵対していた保守陣営——政治家、宗教家、哲学者、ジャーナリストらへの宣戦を取り下げ、論破を謝罪し、慈悲を懇願する内容である。まさにオトコ社会への無条件降服。いや屈服。かつての同志たちがようやく裏切り者として彼女を一斉攻撃し始めたのは言うまでもなかった。我が国のフェミニズムが一時的な混乱へ突入した問題の著と言える。（ここらあたりで、あの動画が消えている。もはや山本は攻撃対象に値しないと判断されたのだろうか）

- ・『ただ愛に生きる』

これはもう学術本でもなんでもない。芸能人のオノロケ本と評するのが正しい。山本教授がついに結婚したのだ。相手は格闘家である井崎金次郎。身長2メートル、体重130キロを超える巨体の持ち主で、交際のきっかけも、すっかり息を吹き返した星彗照世会が主催する合同見合いだということから、フェミニズム教授の栄光の過去は完膚なきまでに粉碎されたと言っている。（余談だがこの妻は夫を『金さま』と呼んで、かしずいているらしい）

- ・『私、帰依します』

著作目録に並んではいるものの、著作ではなくフリーペーパー。井崎佳恵は出産したのを機に入信したのだった。もちろん太良一玄夢の説く教義にである。結婚以降はほとんど広告塔として活動していたのだから、時間の問題と思われていたため、発表があってもニュース性は薄かったが……。その後は育児に専念しながら、まれにフェミニズムを揶揄する論文を書いたり、教祖を礼賛する記事を書いたりして、まともな学者たちから顰蹙を買い続けている。（ちなみに高齢出産ながら子供は三つ子である。公表はしていないものの排卵誘発剤を用いたのではないかと思われる）

――部屋の隅の扇風機が軋んでいる。

雨蛙の皮膚のヌメリのような風は、ランニングシャツ姿の私をますます汗ばませた。

私は手にするのすら忘れていた缶ビールを半分ほど一気に飲みする。お湯は入れたものの割箸を突き刺したままだったカップ麺を啜り上げる。

やはりこの事件は面白い。

年表を見て誰もが気づくのは、『射精される正義感』と『真版・乳房の使い方』の間の一年のブランクだろう。ここが山本佳恵の分水嶺だった。

いったい彼女に何が起こったのか？

大学だから長期の夏休みがあるわけだし、学会などで我が国を離れる場合も多い。山本の豹変に納得がいかない一部同僚たちが当初、カルト教団による拉致監禁洗脳説を疑ったのも無理からぬところである。洗脳が現実存在するのは間違いない。真犯人ではないのに殺人を自供する冤罪者や教育の濫用による偶像崇拜の徹底などはその一種といえるだろう。

しかしこれほどの完璧な『寝返り』まで演出できるだろうか。

これは監禁拘束中の短期的な変節ではないし、山本は年

端も行かない児童ではなく気鋭の大学教授なのだ。現代の科学はまだそこまではいっていない、という反論は、星彗照世会の潔白主張会見より説得力があった。もちろん山本本人が否定している以上、事件にはならず当局の捜査も確認されていない。煮え湯を飲まされたフェミニスト・サイドが期待したような展開にはならなかったわけだ。

だが変態妄想人間にとってはじゅうぶんすぎる。

箇条書きされた年表のみでも、妄想は次々に復顔されていく。すでに陰茎は痛いほどにゴロついている。出羽健を欲情させるすべての要素がこの事件に詰まっていると言っている。

闘う知的熟女ヒロインの活躍、激しい攻防と束の間の大勝利、悪漢の卑劣な反撃、虚をつかれたヒロインへ一気に投網が放たれる、雁字搦めにされ、満座注視の中、引き上げられ、ついに全裸にひんむかれ、悪漢の俘虜となり、拷問と洗脳の末、正義を捨て悪の教義に忠誠を誓うヒロイン、ミイラ取りがミイラになるお馴染みの『バッドエンド』・・・。

冷えた味噌汁のような残りのビールを飲み干す。胡座の中央のテントが醜く大きくなった。

・・・しかしこの年表だけなら、パソコンのHD内に蓄えてある私の手持ち情報とほとんどが重複している。それなのにここまで興奮している自分にも呆れるが、パパ

ラッチにとってお宝と鑑定する内容には程遠い。あの牝狐が大仰に演出を凝らして手渡してきたものだから、すっかりその気にさせられてしまったが・・・。

いや、待て待て。野村妙子は私のHDの中身はリサーチ済みだと言っていた。当然『山本事件』フォルダも知っているはずだ。なのに、同じ内容の餌を渡してきたのである。真意があるはずだ。

何だ、それは？

レポートの次のページにはURLが三本、無造作に列記されていた。

動画だ。

当然、山本佳恵の映像だろう。

卓袱台から組み立てラックへ飛びつき、iMac（唯一の金目の物）を起動させ、回線をつないだ。

最初のURLを打ちこむとすぐに再生が始まった。

期待は残念ながら半分すかされる。

これは消えた例の動画だ。

当然私も観ている。記憶の襞に刷りこまれるほど何度もだ。

ただ違法動画扱いだったのでダウンロードは出来ていなかった。久しぶりに目にするお気に入りの映画くらいには懐かしかった。

（これは大学PR用に作られた公式のビデオであって盗

撮されたものではない。内容自体に衝撃的な部分はない)

ある年の、K大オープンキャンパス。冒頭、緑濃き学び舎が映され、すぐに校内の階段教室にカメラが切り替わった。

教室はほぼ満員。聴衆はK大に興味を持つ来春卒業予定の高校生。圧倒的に女子が多い。掘り鉢状の底に教壇があり、一人の女性が登壇した。

『それではこれから社会学科の模擬授業を始めます。担当の山本と申します。四十五分間程度、お付き合いください』

落ち着いた、包容力のある声——例えば女優の高島礼子のような声——が手にしたマイクを通して流れた。

山本佳恵教授は撮影時、まだ四十代だった。ジーンズに萌葱色のシャツ、その上から紺系統のジャケットを羽織っている。髪も今のようにショートにしていなくて肩まで届いている。ボサボサではないものの美容室程度の手入れとも無縁であるのが一見してわかる。平凡な目鼻立ちで、化粧の努力も怠っており、カメラを通せばなおさら、凡百感が増幅している印象だ。

(しかし変態の出羽健はこれで何も不満がない。フィクションではないのだ。ブスでないなら御の字である)

授業は四十五分といていたが、ビデオは八分五十五秒に編集されている。

前半はフェミニズムの歴史など地味な話に終始。それでも、さすがにスター教授だけあって学生たちは興味深げに耳を傾けている。

後半は一転、自著『教祖の野望～私はどうやって学園を守ったか』に言及。テーマが生臭くなってくる。教授も熱を帯びてきたのか、ジャケットを脱いで半袖シャツ姿になった。なかなかのナイスバディ。シャツの臍付近にまで出来た両胸のたっぷりとした影は――教室の奥、すなわち階段の上から照明を当てているため、より深く濃くなって見えるのを差し引いても――Eカップはともかく豊満な乳房が実っていなければ生じないものだろう。あるいは、オーバーヘッドプロジェクタで映し出されたスクリーンへ直接、指をさして講義する時に、こちらへ背を向けた瞬間、刺激してくるのはジーンズを盛りあげる臀部の発達ぶりである。太腿から尻にかけてがパンパンだ。フェミニストになって何年経ったのかは知らないが、よくぞここまで成熟を許してくれた、温存してくれた、とお礼を言いたいものである。

(私は新たなビールの栓を筆りとる)

『皆さんが大学に入学して——K大じゃなくても構いませんが——学生生活を開始するにあたり、まず最も注意して頂きたい点はですね、孤立しないこと、これを肝に銘じて頂きたい。サークル活動でもいいでしょう。ゼミに入るのもいいでしょう。ただお喋りするための友達付き合いでもかまいません。教授たちと顔見知りになって酒を飲みにいけるなら最高です。あるいは独りで勉学に集中する、これでもかまわない。対話ですからね、学問は。対話はやはり他者とのつながりです。孤独かもしれないが孤立ではない。孤立にこそ奴らはつけ込めます。カルト教団に勧誘され洗脳を受けた学生のほとんどは学内でも家庭内でも孤立した環境に置かれていたことが私たちの調査で明らかになっています・・・』

オープンキャンパスの模擬授業では異例の注意喚起かもしれないなかったが、学生相談室で奮闘した山本教授としては避けて通れない心境だったのだろう。しかし名指しとまではいかなかったものの、面罵されたに等しい星彗照世会がどれほどの怒りをたぎらせたかは想像に難くない。有数の名門私学であるK大への進出を寸前で阻止されたばかりか、マスコミへも邪教集団として告発されて叩かれまくった時期である。事あるごとにトドメを刺そうとしてくる女教授には殺意すら抱いたとして不思議はないのだった。

（私はJavaで作動する動画プレーヤーに『コメント入・切』スイッチがついているのに目をとめた。現在は『切』になっている。どうやらこの動画ファイルは原素材のビデオから直接落としたものではなくて、某動画サイトに投稿され、『流しコメント』で散々汚されまくったあのバージョンの方であるらしい。私は巻き戻し、『入』にして、再生ボタンを押した）

K大キャンパスが映し出されると同時に、様々な文字サイズ、文字色のコメントが、蜂の大群の如き勢いで画面右から左へ流れこんできた。坊主憎けりゃ袈裟まで憎い、山本佳恵に職を許しているK大への罵詈雑言の嵐である。数ヶ月分のコメントだから数が多過ぎて画面が埋め尽くされてしまい、本来何が映っているかさえ判別つきかねる始末である。これでは山本への侮辱のメッセージとして使えない笑い話になってしまう。おそらく、このコメントによる謀略を画策していたはずの連中——星彗照世会そのものかどうかはわからないが——もそれに気づいたのだろう。肝心の山本教授が登場してきた場面からは、彼女が識別できる程度には数が減らされ、挿入位置にも工夫が感じられるようになった・・・。

『信教の自由を弾圧するファシスト！』『学生の良心を管理する体制派！』『98日後、神罰が下るぞ』『宗教

解体を企む無政府主義者！』――

（ここらあたりまでなら、辛うじて大学構内の落書きレベルではあるが、山本の姿が大きく映るにつれ公衆便所のそれへ急降下していく）

『顔がマンコ』『つーか糞』『とりあえず股、洗っとけ』『ゴラ”ア～家事せんか～ボケ～』『マイクがチンポ代わりなんですね、わかります♪』『タンポンの紐、摘ませろ』『←とっくに閉経だろ』『お前のおつむでいったい何人の男と寝りゃ教授になれんだよ、アーン？』――

（ジャケットを脱いで、カルト教団云々のくだりになれば・・・）

『ジーンズも脱げ、ババア！』『シリコンだろ、騙されんぞ』『真っ黒な乳輪ツバでベットベトにしてえ』『この女と一緒に風呂に入った女が言ってました。この女は肛門から洗うそうです。山本ゼミ生より』『こいつはそもそも淫売なんだから許してやれ』『脇毛を毛抜きで一本一本抜いて半ベソかかせるってのはどーよ』『そのぶよぶよの肉、説教してやるからこっちへ来なさい』
『女に教授が出来るんだったら男も子供が産めますっ

て』――

匿名下に行われるこうした『暴走行為』は、彼あるいは彼女の日頃の生活の鬱憤ばらしの性格が濃く、すべてに深刻な背景があるわけではない。だからこそアジテーターたちが最初にまとまって意図的なコメントの主旨を投入すれば、流れは簡単に決定する。所謂『釣り』だ。女であり、教師であり、フェミニストであり、印税を貯めこんだはずの金持ちでもある山本が対象者であるこのケースでは、正統感や正義感を刺激し、組織化を煽ることが容易だったのだろう。まさに『射精された正義感』なのだ。

さてさてこの動画はあくまで食前酒。

久々に見た山本佳恵の、とても洗脳されるようなやわなタマとは思えない充実した教養人ぶりと、とてもあれほど明晰な論文を書くように思えない肉満体型に、私の心身も十二分に熱くなったので、そろそろ本日のメインディッシュといこうか。

私は今度こそ未見であるだろう次の動画のURLを書き込んで、鉄琴でも鳴らすようにキーボードを叩いた。

突如画面に開く別ウインドウ――IDとパスワードの記入を要求してきた。それがなければ動画はスタートしない仕掛けである。急いで三行目も試してみたが、同様の要求が突きつけられた。

一気にアセトアルデヒドが血中から蒸発し、即席麺の未消化分が不快な固形物として胃の運動を濁らせる。

野村妙子の陰謀だ。野村妙子の高笑いが聞こえる。

情報小出しの魂胆がだんだん見えてきた。

『由らしむべし知らしむべからず』を地でいく管理術ではないか。

散々、回避の方策を考え、十三回連続に舌打ちをし、ひらめいて、メールボックスへ直行した。

思った通りだ。

奴から新着メールが届いている。

読んでみようじゃないか。

「前略 出羽健氏。

約束通り週末のスケジュールを以下に書く。万障繰り合わせのうえ遅刻せずにやって来たまえ。

（待ち合わせの場所。日時。交通費は支払われるとの追記あり）

ところでレポート内にあった動画のURLはすでに試してみただろうか？ 狼狽は想像できるがご乱心はいけない。IDもパスワードも必ずや貴方の元へ届くはずだ。例えば貴方が今夜から取りかかるであろう新作小説を、四百字詰め換算でとりあえず五十枚分、書き終えた暁に

は、それらは貴方の手に渡されるかもしれない。信用しなさい。いつだって我々は出羽健氏の最良の後見人である。

草々

野村妙子」

Tough Bitch! (タフ・ビッチ！)

新作小説とは太良一玄夢を釣るための餌に使う小説か……。本格的に書けというのだな——まあそうでなければすぐに馬脚を現すだろうけれど——それにしても『とりあえず五十枚』だなんて気安く言ってくれる。私がどれほどのエネルギーを持って小説に取り組んでいるか、知らないだろう。書きたい衝動を臨界にまで高めるのに、開始点がゼロだとして通常なら一ヶ月はかかる大仕事なのだ。それもゼロの時点で書くストーリーがすでに頭に浮かんでいなくてはならない。声楽家が寝起きに歌えないのと一緒に。歌どころか声だってどれくらい出せるか、危ないだろう。編集員なのだからそれくらいの常識はあるはずだが、素人変態作家など、作家の範疇にも人間の範疇にも入れていないのだ。

Tough Bitch!

ああしかし……。残りの二つの動画……。物の見事に野村妙子の術中にハマり……。おろおろと狼狽えながら再び動画ダウンロードのページに戻り……。ただただ溜息

をつきながらURLの文字列を眺める・・・哀れな変態
性欲者・・・

このどちらの動画もやはり山本教授を中心にして撮影したビデオなのだろう。何だ？ 大学の校務を映したもの？ それとも私的な日常生活の風景か・・・。プールで泳ぐ山本教授の水着姿、なら五千円を払う用意をしてもいい。もし星彗照世会との交渉場面の隠し撮り、だったら五万円の値がついたって競り落とす気、満々だが？ レポートだって「その二」があるはずだ。既存情報が「その一」に網羅されているとすれば「その二」に書かれているのはいったい何か？

畜生！ 妄想の川は、いつだって上流が悲観、下流が楽観の位置関係だ。放っておけばすぐに下流に水が溜まってくる。やがて全てを飲み尽くす大河となって、妄想している本人すら溺死させてしまうのだ。

いいだろう。

そういう沙汰を通してくるならこちらも腹をくくろう。小説書きの経歴は二十数年程度だが、変態の人生は五十年近くある。真っ当な人生を捨ててまでこの道を歩いてきた私だ。こだわりもあれば意地もある。これまでにない名作を書き千切り電光石火の早業で、URLを手中にしてみせようじゃないか。野村妙子よ、吠え面かくな。変態作家の名作は、フェミニズムの逆刺となる可能性もあるのだ。『O嬢の物語』みたいに！ そうなってから後

悔しても、もう後の祭りなのだからな！

・・・しかしとりあえず今夜は寝よう。今日は色々なことが起こりすぎた。疲れた頭で書けるのは珍作が上限。それではフェミニストに踏ませる犬の糞にしかならない。

私は一行目の動画をコメント付きで三たび再生し、加えてソシアルのHPに掲載されていた佐々木久子の写真を呼び出して並べ、自慰を済ませた。

フェミニズム誌編集部

雑誌ソシアルの編集部は聞き慣れない証券会社や貿易商社などが入っている中古ビルの三階にあった。

空きテナントも幾つもあって女性誌の本拠としてより胡散臭いペーパーカンパニーの住所に似つかわしい空気であった。

今日も初対面と同じ衣装の野村妙子に先導されてエレベーターを下りる。

「すっかり出羽健氏の担当にされちゃったよ」
言葉とは裏腹に、顔には苦笑すら浮かべない無表情が整っている。

「下っ端なんですか？ それとも編集長の右腕？」

「どっちでもいいさ。重要なのは私には他の仕事が山ほ

ど残っているという事実だね」

野村妙子はこの階の最も奥にある扉を無造作に開けた。消しがたい女臭さが顔を包んでくる。汗と芳香剤（ベビーソープか）が匂いの成分で、鼻腔よりも胸奥あたりを刺激してきた。

ファイルの山を積んだ仕事机数台が事務所の空間を埋めている。机にはそれぞれ女が取りつき、ノートブックや書類を睨んでいた。

扉の開放により、机に伏せられていた顔が一斉に入り口へ向けられた。

四名の女性編集員。口吻屈強なフェミニスト。

「みんな、作家の出羽健氏よ。創作意欲を高めてもらうためにも、ちゃんと顔とプロポーションをお見せして」私からみて手前の席の、肥満系の女が赤ボールペンを振った。

「――野村、ボディチェックを忘れてるよ」

あ、そうかと野村妙子は慌てて私の胸を押し、壁際へ押しつけた。

「信用しないわけじゃないんだけど盗聴、盗撮の機械でも持ちこまれたら不快なんでね」

「まさか。味方でしょう。嫌われたら最後、潜入先に見捨てられちゃうわけだし」

「そういう常識が通用しないのが変態なんでしょ。貴方の書いた小説が証明している」

野村妙子の両手が私の身体を通過する。指は動かさず掌だけの触診。

慎重ぶりはこればかりではない。待ち合わせは最寄り駅から二つ乗り越した駅の、大型商業施設との連結部だった。そこからタクシーで戻ってきたのだ。尾行にでも備えているとしか思えない。

四人の女たちは立ち上がり、我々二人を取り囲んでくる。衆人環視の中のボディチェックあるいは身体検査……。私の小説のヒロインたちはいつもこうした恥辱に身悶えしている。これは挨拶代わりにの復讐だろうか。

「さすが野村さん、変態の扱い、慣れてるわ」
最も若そうなポニーテールの女が笑っている。

「言うなって――」
野村妙子も苦笑を浮かべたようだ。

「いくらカメラや盗聴器を没収したって作家には筆があるんだから、いずれ我々なんかグッチョングッチョンに輪姦されまくる場面に登場させられるんじゃないの。潮なんか吹かされたら、たまらないわね」

とは、この中では唯一世間的な意味で美人と呼べる顔立ちを持つ、背丈のすらりとした女。アイドル系の小顔であり黒目がちの潤みをたたえた瞳を持っている。フェミニストだとは誰も思わないだろう。真ん中分けの長髪が肩先へ届いている。もう十歳若ければ本当にタレントと

してスカウトされるかもしれない。

「体重六十五キロがボーダーらしいよ」とさきほどの肥満系。顔は童顔と言える。「デブ専は別にして、それ以上だと変態小説のヒロインの資格はなくなるらしい。私なんか責められる側じゃなくて責める側に登場するキャラでしょう。彼らの妄想は演歌の歌詞より類型化されているからね」

「靴！」浅黒い肌をもち黒縁眼鏡の女が口数少なく指摘する。「そこに隠している場合が多い」
舌打ちしながら靴まで調べていた野村妙子がようやく立ち上がった。

「ちえっ、ギックリ腰が再発しちゃうよ」
ブツブツ言いながらも、彼女は集まったメンバーを紹介してくれた。

ポニーテールの若手が近藤友美。

眼鏡の浅黒肌が橋本瑞枝。

肥満が馬場由里子。

そしてアイドル系は西口則子。

一般的な物差しで測れば、西口＞野村＞近藤＞橋本＞馬場となるだろうか。出羽健的には、野村＞西口＞橋本＞近藤＞馬場と入れ替わる。・・・いや、妄想セクハラは数秒以下で中断しておかなくては。どんなに鉄面皮を決

めこんでも、こいつらは鋭敏な知覚を持つ肉食系女子である。看破され袋叩きにされるのは必定だ。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

山本佳恵教授の敗北 その二 あるいは林麻子弁護士
士の屈服 その零 a

じっさい自らの動機に従うものでない創作活動ほど私にとって辛いものはない。

出羽健の小説は『花果てる果ての花』から『隣人父子』まで十八作品を数えるが、すべてが純粹に自分のために書いた小説なのである。職業作家ならばほとんどの場合、処女作を除き、プロデュースは編集者という他人の手が関与する。締め切りがあり、原稿枚数に制限があり、書く内容にも少なからず注文がつく。それらのストレスを抱える代わりに、職業作家は原稿料や印税といった金銭を対価として獲得するわけだ。残念ながら私の才能はそういったプロデュースの関与とは徹底的に噛み合わない種類のものでしかなかった。ストレスが一つでもしかかると一向に筆が動かないのだった。二つもあれば

体調がおかしくなるほどである。ようするに本物の物書きではなく、多少文才のある本物の変態にすぎないのであろう。野村妙子が言うように私の下位には人でなししかいない『負け組』なのだ。

そんな私が追い込まれたこの状況はまさに地獄と言ってよかった。

朝から晩まで、ほぼ一時間おきに野村妙子から督促のメールが届く。書き上げた一日分の原稿は回収され、まず例外なく駄目だしを食らう。

「回りくどい」「もっと過激に」「ヒロインの内面が書けていない」「『てにをは』の基本がなっていない」アンチ・ポルノの闘士がSM小説を指南するパラドクスは珍妙だが、もはや野村妙子に容赦はなく、マン・バッシングを楽しんでいる感さえあった。

「あまりにレベルが高すぎればヨシオカチャンは逆に怪しむのじゃないですかねえ」

私がシゴキに耐えかねて弱音を吐いても冷酷な返事が戻ってくるばかりである。

「これでちょうど良いくらいと思いなさい。貴方にはブランクがある。作家の沈黙ほど読者の期待を高めるアクションはない。レベルアップのない再生産品を喜ぶほど、太良一玄夢の鑑賞眼は低くないのよ」

ちなみに私は私の家計を支えていたアルバイトを休職した。これも小説に専念するための野村妙子の指図であ

る。この間の生活費はソシアルが面倒を見る次第になった。流行作家並みの高待遇のようにも思えるが、反面、一切の生殺与奪の権を譲渡したとも言える。

最初に彼女に見せた三十枚も結局は全面的に書き直しとなり、唯一とっていい動機付けである五十枚に達するまで、約三週間もかかってしまった。慢性の下痢に苦しみながら青息吐息の中間点不時着である。

——『その二』は電子メールではなく郵便物として宅配されてきた。

「前にも注意したようにこれは本来、部外秘の文書なのだから慎重に保管しなさい。もう遊びでないのはわかっているはずだけれどね」

添付されていたメモにはこう書かれていた。電子メールだと外部へ漏れる危険性があるというのだろうか。時としてみせる彼女たちの過剰な防衛体勢が、これから立ち向かう敵の手強さを如実に示しているのだとしたら、腹の底がまた緩くなるストレスが新たに加わってしまうわけなのだが・・・。

封筒の中身は僅か三枚ばかりのレポート用紙であった。

山本ゼミの構成の変遷——？

たしかに、これは既存情報すなわち私の収集した山本事件に関する資料の中には入っていない新種ではある。

そして用紙の最後に記載されているIDとパスワード！

これを、ここひと月余り見つめるしかなかったあの認証画面へぶちこめば、夢のような動画が展開されることになる。

自分の顔が暖気に融けだした雪ダルマのそれのようになっているのを自覚する。

しかしまあ待て。

もはや慌てる必要はない。お預けを食わされた時間が長いほど、骨にすぐにかじりつくのは勿体ないではないか。

『主食』はレポートという『前菜』を賞味堪能してからにしよう。

一枚目。

20XA年度 山本佳恵教授ゼミ名簿

氏名	進路
林麻子 ゼミ長	司法試験合格 弁護士
高田美々	渡米後 シンクタンク勤務
中島桃子	大学院
瀬川明日香	不明

以上四回生

村西沙耶

江藤倫子

小西レイ

早瀬映見

佐藤彩花☆

以上三回生

山本佳恵 担当教授

大学の内部資料だろう。それに対して追加の記入がなされているわけだ。調査主の名は記載されていなかったが、もちろんソーシャルにちがいない。

20XA年度といえば山本教授が多くの問題作を世に送り、赫々たる声望に包まれていた時期と重なる。すでに星彗照世会との戦いにもほぼ決着がつき勝利宣言ともいえる『教祖の野望～私はどうやって学園を守ったか』を執筆していた頃——出版は一年後——だ。絶頂期ともいえる山本の実力と人気が動因となって、ゼミに志願してくる学生たちにも優秀な才能が揃っていたはず。巣立っていった四回生の進路をみれば一目瞭然。林麻子（ハヤシ・マコ）弁護士の名は私も知っている。留意点をあげるとすれば、進路不明者が一人いるのと、三回生『佐藤

彩花』の名のみに☆印が付されているところである。不明とは就職浪人の意味か？ K大卒とはいえあり得ない話ではないが『消息不明』の不明なら慮る点となる。☆印の解説をする注記はどこにもない。これまた推理していくしかない。

二枚目。

20XB年度 山本佳恵教授ゼミ名簿

氏名	進路
村西沙耶	ゼミ長
江藤倫子	不明
小西レイ	T新聞勤務
早瀬映見☆	不明
佐藤彩花☆	専業主婦
以上四回生	専業主婦

山根いずみ
渋谷早紀
吉倉綾乃
筒井早苗☆
喜多雄一☆
中田信二郎☆

以上三回生

山本佳恵 担当教授

ここで注目すべきは三回生——K大では三回生から学部
のゼミの受講が許される昔ながらのシステムである——
に男子学生が二人、参加している事実である。山本教授
が名うての女性学専攻であるのを踏まえれば、通常、女
子大生の牙城となるのが一般的だ。前年は九人全員が女
子であった。それ以前もおそらくそうであろう。もちろ
んK大は男女共学校なので、山本ゼミであっても男子禁
制ではないはずだが、かなり勇気のいる行動と思われる。
ゼミの活動が就職に影響を与える場合だってある。
彼らの卒論が手に入るなら読んでみたいものだ。

さらに注目したいのは卒業生の進路だった。不明が二人
に増えている。しかも一人は成績優秀者で人望があるは
ずのゼミ長。さらに就職せずに専業主婦になった学生が
二人もいる。実はこれが最も驚くべき点かもしれない。
フェミニズムの最先鋭教授の元から巣立った女性が直に
家庭の枠に閉じこもったのだ。お嬢様大学の卒業生だっ
て腰掛け程度には会社勤めをするのが普通だろう。

異例の展開が二つ、重なったわけである。

☆印も増殖している。三回生の半数はそうであり、四回
生にも『佐藤彩花』だけでなく、新たに一人が加わって

いる。その二人が同時に専業主婦化したのは何の暗示だろうか。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

山本佳恵教授の敗北 その二 あるいは林麻子弁護士
士の屈服 その零 b

慌てて追うカメラ。

レンズはカメラウーマンの足下を映す。でないと転んでしまうだろう。

荒い呼吸が集音される。

『待ちなさい、君たち！』

たぶん頭上で鋭い声がした。

呼吸も足も止まり、カメラが階段を舐めあげた。

林麻子は三人の白装束を見事に追い越して、その前に立ちはだかり、進行を急停止させたのだ。

見下ろす美人女子大生と見上げる男たち。さらにその下からカメラが挟みこんだ。

機先を制せられ、状況の把握に戸惑っていた白装束のうち、最も足の長い男がベレー帽に手をやりつつ、一声を

発する。

『おやゼミ長さん、怖い顔をして、どうされました？』
この男は彼女を知っているらしい。

『どこへ行くつもり？』
林麻子の声は自分を知られている事実には動揺していない。

『そんなこと、教える必要があるのかなあ。自由な大学祭でしょう』

『昨日、山本先生の講演を妨害した張本人がよく言うわ』

『妨害？ それは聞き捨てならないな。質疑応答の時間に二三、意見を述べただけですよ。あの程度も許さないなんて、山本はやはり思想信条の自由を弾圧する全体主義者なんですね』

教授を呼び捨てである。彼らの素性が明らかになってくるようだ。

林麻子は微動もせずに反論する。

『講演会出席者の顔写真を、フラッシュ付きで派手に撮影したのは、脅迫以外の何だって言うの。講演中もその服装で歩き回ったり、体操をしたり、立派な示威行動でしょう、星彗照世会のユーゲントと呼ばれるだけのことはあるわね』

そうか。そういう青年組織があるのか。

『それこそ立派な誹謗中傷ですよ。ゼミ長さん。我々は

隣人を理解しようとしているだけです。残念なことにこの隣人は超法規的手段を使い、素朴な布教活動まで排斥するならず者ですから、調査や観察が必要なんですよ。仕方がないでしょう。すべての罪惡に神の慈悲が及ぶわけではありませんから。山本に更生の余地があるかどうか、審査しなければなりません』

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

クレア・ワトキンス

100枚まで残り10枚を切ったところで、私の顔に赤い湿疹が浮きでてきた。

もはやストレスで胃に穴が開きそうなくらいである。体調の不具合を訴えると、私が条件闘争に走ったと勘違いしたらしく、野村妙子は自ら私のアパートにやってきたのだった。それも万が一に備えたつもりなのか、馬場由里子をボディガードよろしく引き連れての現地視察である。

「フムフム、これは本物の湿疹だわ」

憮然としている私の顔面を覗きこみながら、馬場由里子

はしたり顔で頷いている。

「仮病じゃありませんよ！」

「ほら、興奮しない」野村妙子は卓袱台の前に胡座をかいて座った。「馬場は医師免許を持っているのよ。若い頃は海外でボランティア活動をしていたんだから」

「へえー・・・」

するとボディガードではなく治療のための同行だったのか。なぜまたソシアルなんかに――疑問は慌てて飲みこんだ。

「美人女医じゃなくて悪かったな」

屈託なく笑う丸顔はやはり多汗症からは逃れられないようだ。はち切れんばかりのブラウスも汗を含んで下着が透けている。さすがにこの肉のボリュームではノーブラは逆に煩わしいのだろう。

「まあ、たちの悪い皮膚炎ではないだろう。ストレスがなくなれば半日で全快する類いだな」

「これ以上続けたら、湿疹の中に目鼻が埋まってしまいます」

「ないない、それはない」野村妙子は即座に否定。

「私を担当する編集員は鬼ですから、怖くて安眠できませんし」

「まあ、野村が鬼だというのは同感だがね」

そう言って豪快に胸を上下動させた馬場由里子は診察をする気はもうないようで、扇風機の前に腰を下ろし――

正座はもちろん胡座も苦手のように――涼風を独り占めする。

「――デブにクーラーなしは拷問だって」

「クーラー買ってください！ もっと作家を大事に！」

「調子に乗らないの。これで我慢しなさい」

野村妙子は手にしていた紙袋から人気アイス店のパッケージを取りだした。珍しく半袖シャツにジーンズである。私服か。

「子供扱いだな。缶ビールくらい差し入れてくださいよ」

「今飲んだら、これから書けなくなっちゃうだろ。午前中は何枚書いたの？」

「・・・今日はさらに不調で一枚きり・・・」

ヤレヤレと鬼編集員は部屋を見回した。iMacを見つけると私の許可もなくスリープを解除してしまう。勝手知ったる他人の家、すぐに『海猫04』のフォルダを発見し、ファイルを開くと読み始めた。
――そしていつものように舌を鳴らす。

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

クレア・ワトキンス b

「やはり『ヒィィーっ——』は入れないとねえ」
徹夜したのにちっとも影響が顔に出ていない野村妙子は
そう言ってワープ口画面を覗きこんでいる。

「編集員だったら『何はともあれ100枚、いきました
な』くらい声をかけるのが常識なんじゃないですか。小
林信彦の小説によく出てきますよ」

「ようやくこれでミッションのスタートラインについた
って、ところだからね。餌は獲物が食らいついたとき餌
になるんだ。脱稿即商品価値が認められる流行作家の作
品とはちがうさ」

まったく口の減らない牝狸である。鞭でシバキあげたい
のはこいつの尻だ。

「早く『その三』、渡してくださいよ」

野村妙子はアタッシュケースから用紙を取り出した。私
はそれを引たくろうとして失敗する。一睡もせずに書
き続けていたためやや興奮状態である。

「こうして傍から見てみると二人は仲のいい夫婦に見え
ますね」

そう口を挟んできたのは近藤友美。日が替わる前に馬場
由里子と交代するため訪れてきた。

「近藤——」野村妙子の声は釘を打つ金槌に近い。「お
前はいいから自分の職務を果たしなさい」

近藤友美はポニーテールのままだったが、タンクトップとショートパンツを身につけていた。二十代特有の若々しい肌の輝きが充血した目に染みるようだった。彼女はキッチンに入り、朝食の支度を始める。

「へえー、ノルマを達成するとこんなご褒美があるんですね。手料理の朝飯なんて何年ぶりだろう」

「貴方のためじゃないよ。私用の朝食だ」

「・・・」

「情けない顔をするんじゃない。冗談だって。ちゃんと二人分、用意するさ」

「・・・野村さんは料理できないんですか。フェミニストの年季がちがうんだろうな、彼女とは」

「ローテーションがたまたまそう言う巡り合わせなの」好奇心で変態作家のプライベートを覗きに来たというところだろうか。

ようやく野村妙子は私に用紙を手渡した。

しかしそれは『その三』ではなかった。

「これは？」

「さっそく掲示板にアナウンスを出しましょう」

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

クレア・ワトキンス c

二人はすぐさまiMacに取りついた。用意してきたらしいCD-ROMやらマニュアル本やらを広げて、いったい何を始めるつもりなのか。

説明を求めるべく野村妙子の色白の顔を見る。

「心配いらない。貴方のパソコンに防衛システムを組みこむだけだから」

「は？ 防衛システムって・・・」

「我々にハックされるくらいだから貴方のパソコンは脇が甘いよ。ユルユルの禪ね」

野村妙子は立ちあがり二人の肩越しにディスプレイを覗いた。私も仕方がなく後に従う。

西口則子がCDを側口から装填すると、橋本瑞枝の長い指がキーをタイプし始める。十本の指を漏れなく素早く使っているところからして、かなりの訓練を積んでいると思われる。

「・・・あの、ユルユルの禪でいけない理由と言いますと？」

「ミッションが開始される以上、敵の反撃を常に想定しておかないと。ヨシオカチャンが貴方のハードディスクを覗きたいという衝動に駆られたら、そして覗いてしまったら、ミッションは筒抜けになってしまう」

「・・・まあ、そうでしょうけどね・・・」

「そこまでやらないだろうとタカをくくるのは大間違いよ。『Liberty of liberties』と『social』の戦いの多くはサイバー・ウォーズなんだから。星彗照世会もその能力を蓄えていると考えていいでしょう」

私はようやく合点がいった。きっと日本のソーシャルも星彗照世会のパソコンをハックしようと試みたのにちがいない。それはおそらく失敗したのだろう。彼らの電子戦における実力を評価せざるをえなくなったために、こうした予防措置を講じる必要性が生じたのだ。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

ヨシオカチャン、現れる（着信）

それ以来、私はiMacに触れられない日々が続いている。

彼女たちがアカウントに修正を加え、暗証番号を変更してしまったので、それを教えてもらえぬ私では起動すらできないのである。

一日に一度——たいてい夕方——ソーシャルから野村妙子

が来て、ロックを解除し、掲示板への書きこみやメールの着信履歴を確認するのが日課となった。iMac自体をソシアルへ運んで勝手に事を進めれば能率的かと考えそうだが、出羽健の変態としての勘や、出羽健の文章力が急きょ必要になった時、困るという。パソコンは運べても出羽健を事務所で生活させるわけにはいかない。

「この文体は紛れもなくヨシオカチャンのものだとか、いや他人のものだとか、そういった判断は変態嗅覚を持った同じ穴の貉じゃないと心配よ。それに相手は『出羽健文学』に精通している熱狂的ファンでもあるのだから、我々素人が似せて文章を書いても騙しきれないでしょう。不審を抱かれたただけでも一巻の終わりなんだからね」

野村妙子はディスプレイを見つめたまま私の肩を叩いた。

「——なので出羽健先生はずっとミッションの中心人物であり続けるわけよ。おめっとさん」

「ならもっと大切に扱ってくださいよ」

私の言葉も弱々しいものだ。アメとムチの管理はそもそも従属の証なのに、アメは木の葉から垂れる雫、ムチはバケツを引っくり返した豪雨ほどもある。これでは殺すために太らせる食用豚より待遇が悪いではないか。ちなみに『出羽健文学』という表現が今日のアメなのにちがいない・・・。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

ヨシオカチャン、現れる（周到な罠）

西口則子は十五分もしないうちに飛びこんできた。ジーンズとタンクトップ（青）が躍動するよう。

「来たって？」

ロングヘアが背後へなびく。

頷く野村妙子が席を代わり、履歴を人差し指で示す。

「おいでなすったか変態教祖！」

さっそくタイプを開始する西口則子は、キーボードにまで落ちてくる自分の黒髪を肩越しへ飛ばしやる。美しい横顔がしてやったりとばかりにニタついている。

無言のままの野村妙子が背中へ回った同僚の黒髪を手際よく束ね、ゴムか何かに通してしまう。おかげで横顔ばかりでなくうなじまで晒された。肩を剥きだした四本の女の腕が蒸気タービンのクランクのように動き回っている。

「ふん、どうやらこれまでのヨシオカチャンのメールと同じ発信元が使われているようよ」

「ウィルスは？」

「爆弾的な物はなしだね」

「問題はトロイの木馬型か」

「そう。あいつはファイルサイズが小さいから検出までに時間がかかる。しかしMacだし、大丈夫だと思うけれど」

「でも我らの出羽健先生は、自分がMac使いであることをご丁寧に何度も公表しているからね。油断できないよ」

「・・・あ、ああ・・・そ、そうか・・・」と私。

いつでもどこでも、安全保障体制を皮肉るのが、相手の知性を貶める有力なデュベート技術である。やられた方は、どうしたって『おバカ』に見えてしまうものだ。

「へへへ、責めない責めない。Mac使いは皆こんなもん。ウィルスなんてWindowsの風土病だとタカをくくっている。でもハッカーがMacを標的にしないのはモチュペーションがないだけだからね」

ヨシオカチャンのモチュペーションは如何なものか？

「——よし、99.99%、ウィルスは検出されなかった」

西口則子は先日の防衛システム導入の際に準備してあったバスターソフトを使って件のメールを分析したらしい。

「じゃ出羽健氏、オープンしてみなさいよ」と野村が顎

をしゃくる。

「また始球式ですか」

「これまでの業績を尊重しているだけよ」

二人の悪女は嘲笑を浮かべて私を椅子に座らせた。

「尊重ねえ・・・」

私はヨシオカチャンの名前にカーソルを重ね、マウスに置いた人差し指に二回、力をこめた。

簡単に展開されるメール。

拝啓 出羽健様。

かつて先生の小説に僭越な感想を何度か送らせて頂きましたヨシオカチャンです。覚えておいででしょうか。

もちろん毎週のようにROMは続けておりましたが、やはり私には先生の小説との出会いにおける衝撃のインパクトが強かったせいか、絵物語への傾倒は小説ほどではなかったようです。（いや、先生のCGの技量は長足の進歩を遂げております。それは認めております。小説のレベルが破格なのです）なので感想等のコンタクトはズいぶんとご無沙汰してしまいました。謹んでお詫びいたします。

ところで先般より、貴サイトの掲示板等にてアナウンスがされている、海猫04執筆開始の件、青天の霹靂とはまさにこのことです。一目見た瞬間、全身が痺れるよう

な興奮を味わいました。これは誇張でも何でもありません。本当にパソコンの前で動けなくなってしまったのです。先生がご存知かどうかはわかりませんが、私の海猫シリーズへの耽溺ぶりは無比のものと自負しております。何十年も探していた、己の嗜好の中心を鷲掴みされたようなストーリーとキャラクター設定に魅了され、いったいどれほどの回数、読み返したとか・・・嗚呼、懐かしいですね！ 女弁護士森川恭子、女子大生高橋ミカ、反戦女優内藤基子、女助教授鵜鴎子、小生意気な田野倉姉妹もありました。そして私にとって超絶のヒロイン、女検事伝法ゆかり・・・どれほど彼女の『ニップレスー前貼り』姿に情欲を掻き立てられたか、私の拙い文章力では到底表現できない領域です。小説の総合的な質で比較してみれば、海猫シリーズを凌駕する作品も、先生の書庫にはいくつか並んでいるのは事実かもしれませんが、私にとってはやはりこの三部作が決定版ということになるのです。

そのシリーズが遂に新しく稿を起こされつつあるという驚愕の新事実。久闊の非礼をお許し頂く前に、こうしたファンレターを送信する行いが、どれほど先生の気分を害するか、理解していながらも、あえてそうせざるをえなかった熱狂的ファンの心情を、どうかお察し頂きたい。お汲み取り頂きたい。

さらに憤怒のお声を頂戴するのは明らかなれど、どうし

てもすがりつきたい衝動を抑えきれないのは、新作小説のアウトラインの情報でございます。シノプシスは？

登場人物は？ 伝法ゆかり他、これまでのヒロインたちは再登場するのか？ 等など、さわりでも知りたい情報は山のようにあるのです。それらを妄想する喜びは喜びを跨ぎ越え、苦しみとすらなって毎晩の安眠を妨げておるのです。これもまた誇張ではございません。本当にこの一週間の睡眠時間は不足気味なのです。

嗚呼、出羽健先生、お慈悲を求めることをお許してください。

さわりのさわりでも宜しいのです。

さわりのさわりのさわりでも構いません。

海猫04の何らかの情報をお教え頂けませんでしょうか。

一つよろしくご検討のほど、お願いいたします。

暑くなってまいりました。お身体ご自愛ください。

不－

ヨシオカチャン

私の顔を挟んで左右に並んだ野村妙子と西口則子の顔は、瞬きを忘れてメールを読んでいる。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

ヨシオカチャン、現れる（神と信徒）

豊満過ぎて目のやり場に困る胸元はカナブンどころか甲虫すら姿が見えなくなるくらいの深い谷間を持っていた。

対する野村妙子も肌は湯気が上りそうである。なるほどノーブラだからポロシャツは着ていなければならなかったが、スラックスは履いておらず、シャワーの湯滴を弾き飛ばしたにちがいない太腿から爪先まで、ピカピカに輝いた両足が女座りに折れ曲がっているのだった。

真っ白なデカパンがフェミニストらしい風情を醸しだしてはいたが、私の部屋がピンクサロンへ転じた騒ぎではないか。

「ついに糞教祖を釣りあげたって。祝い酒を持って陣中見舞いだよ。さあ飲みな」

ビール瓶の二倍はあるだろう馬場由里子の腕が、啞然としたまま両手に握らされた私のコップへ発泡酒を注ぎこむ。

「いいのですか？」

私は野村妙子の火照り顔を盗み見る。

「たまには休息も必要だからね。これからもまだまだ働いてもらわねばならないし」

彼女たちの身体が動くたびに流れてくるソープの香りが酒の肴である。

「肌もあらわなホステス付きだ。出羽健先生も本望だろう」

「うかつな感想をいえばセクハラですから。ちっとも安らげませんが・・・」

「普通の感想を言えばいいだけだよ」

と野村妙子も酌をしてくる。考えようによっては画期的な話である。我が国有数のフェミニストたちに風俗すれの接待をさせている。男冥利に尽きるのかもしれない。

「・・・祝い酒は嬉しいですがね。ご褒美だったら例の『山本教授のその三』を忘れないでくださいよ。ヨシオカチャンを釣りあげたらと、たしかそれがお預けの条件でしたよね」

野村妙子が飲んでいるのはジュースだった。アルコールが嫌いなのは嘘ではないようである。

「まだまだ。餌に食いついたのはその通り。よく頑張りました。しかしそれを引きあげなければ、途中で落としてしまったら、何の価値もないわけだからね。今夜はこ

の程度で満足しておきなよ。馬場のオッパイ、なかなか
揉める代物じゃないからな」

大笑いする馬場はコップに半分残っていたアルコールを
一気に飲み干した。

「出羽健先生の視線は、私の胸に４５％、野村の太腿に
４０％、野村の臍に１５％、の割合で注がれているな。
総合すれば、やはりこの勝負は野村の勝ちのようだよ」

「ちょっと勘弁してくださいよ、そんなの一種の盗撮
だ」

馬場由里子の剥きだしの顔はゆで卵のようにツルツルし
ている。掌をあてがって撫でてみたい誘惑にかられる。
おそらく心地よい弾力に満ちているだろう。頬擦りした
っていいくらいだ。デブ専ではなく偏見がないだけと考
えてもらいたい。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

山本佳恵教授の敗北 その三

旅はスタートしている。

私はボックスカーの後部座席にいた。

運転しているのは野村妙子。

二人のみの乗車。

他のソーシャルメンバーも別途、M県へ入っているそうである。陸路であったり空路であったり、単独行であったり複数連れであったり、日にちをずらしたり、様々な擬装を工作しながら組織的行動を日常に紛れこませているのだった。

「偽物の六四式氏とか赤川京二氏とかも向かっているのかな」

「当然よ。Homer Vargas氏も空港に到着しているわ」
我々二人は夫婦の設定であるらしい。ただしHomer Vargas氏とクレア・ワトキンス『夫妻』とは違い、M温泉郷に入るまでの道程限定の芝居である。その間の不慮の展開に備えた万全を期す設定なのだそうだ。ホテルにチェックインする寸前に私の単独行動に切り替わる。

「いっそこのまま夫婦としてオフ会にも参加すればいいじゃないですか」

東名高速を西へ走る車の快適な振動の中、私は広々とした座席に手足を伸ばして寛ぎながら軽口を叩いた。

野村妙子の運転は実に安定しており、しっかりと車間や車線をとらえていた。

何もかもうまくやる女である。

「あり得ない演出でしょ」と雌狸。「孤高の出羽健先生に妻などいるわけじゃないじゃない。これまで一言も言及し

ていないはずよ。ファンならすぐに見破るわ」

「たしかに――しかし野村妙子氏だったら私の愛人と紹介してもリアリティあるんじゃないかな。まさしくクールなキャリアウーマンタイプこそ私の小説のヒロインの肝ですからね。美人じゃないところなんて、ますます信憑性がある」

「私の夫として全くリアリティがないのが残念な話よ、出羽健氏」

「・・・」

SSでの昼食後、野村妙子は淡々とノートブックを私によこしてきた。

そのHDに例の動画が登録されているらしい。

ついに私の眼前で再生がなされるのだ。

野村妙子の回すハンドルが駐車場から加速車線へボックスカーの鼻面を持っていく。

のびのびと踏むこむアクセルが車窓の景色を流しやる。

じゅうぶんな速度を帯びた車は点々とした車列に合流して、彼女のハンドルさばきも何事もなかったように安定した。

「音声はイヤホンでお願いね」

温泉郷へ私が行った後、この車は移動基地として私の跡をトレースする手筈である。他の編集員の集合場所ともなる。それは星彗照世会の本部へ私が同行した場合でもおなじだ。だから様々な装備が用意されていた。ヘッド

ホンやイヤホンなど幾つも見つけたせる。

私は膝の上にディスプレイを開き、再生の準備を整えた。

『その二』のラストシーンでは、山本佳恵教授が教え子たちとともに星彗照世会青年部員たちの謀略的な行動を看破し、打ち据えて、勇ましい勝利宣言をしたところで終了となっていた。

果たして『その三』では何が記録されているのか――。

深呼吸を省けない興奮が胸を押しつけてくる。

私はトラックパッド上に中指の腹を押しつけた・・・。

黒バック，白文字タイトル――――

『山本ゼミ夏合宿---M県S市』

M県は、言わずもがな、これから我々が向かう星彗照世会の本拠のある県。S市は太平洋に面した小さな港町。会本部施設は隣接するS郡にあるのだった。

東京を遠く離れ、わざわざ『完全アウェイ』で行われるゼミ合宿・・・。

タイトル文字が切り替わる。

『20XC年8月23日』

私は一斉に記憶を点検した。
間違いなくその年は山本教授の例の年だった。
ゼミ名簿を思い出そう。
ホルダーに突っ込んでいたミネラルウォーターのボトル
を抜きだし、飲もうとしたが――

文字の入れ替わり。

『午前5時30分』

早朝にいったい何が・・・視線だけ画面に残し、喇叭飲み――。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

正体

私は汗を拭うのも忘れて一種の放心状態に陥った。
ボトルは空であった。
ようやくヘッドホンを外し、運転席を見やる。

野村妙子は前方を見つめたままハンドルを握っている・・・。

——恐ろしい映像だった。

あの太り肉が山本佳恵教授本人であるのは確定的だろう。顔は確認できなかったが幾つかの状況証拠がある。まず体型。

厚い胸、厚い腰、二の腕や太腿の豊かな肉付きは他の誰のものでもない、山本本人のプロポーションである。彼女の写真や動画を長年自慰の肴に使ってきた出羽健という変態の目は、きっと彼女の肉親のそれよりも確実に生身の真贋を見極められるのだ。

そして声。

高島礼子似の艶やかな声は、運動の掛け声であっても英語を叫んでみても、珍妙な身体カルテの申告であるとしても、はっきりと聞き分けられる。聴覚は視覚より騙しにくく、叫声は囁きよりも演技するのが難しい。

あるいは挙措についても指摘が可能ではないだろうか。動画の中の彼女の動きは管理され統一されてはいたものの、どこか文系一筋特有の運動音痴ぶりが散見できるのだった。男たちに両脇を抱えられた時の足の滑稽なジタバタぶり『一輪車のペダルをこぐ感じ』は、格闘技など、戯れにも遊んだ過去がなく、いやそれどころか、目にした経験すらもないほどのトボけたザマだったではないか。とっさの運動神経を誤魔化すのはさらに困難であ

る。

彼女が山本佳恵その人であるなら，他の三名が山本ゼミの学生たちである確率もほぼ100%にちがいない。もちろん男たちは星彗照世会の青年部メンバーなのだろう。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

以下は有料本編でお読みください。
#####